

# 令和5年度 (インクルーシブ教育実践研究校B) 報告書 向洋新町小学校

## 1 学校の課題

本校には、通常の学級において発達に課題があり診断名のある児童や、診断はないが様々な課題を抱えている児童が多数存在し、それらの児童は、日々離席をしたり、活動に取り組みにくかったりする様子が見られる。

特に、A児に関しては昨年度の取組として、板書やリコーダーなどの本人が苦手と感じている活動を把握し、タブレットの活用や別室での学習等の支援を行うことで、学習に自ら取り組む姿が見られるようになってきた。しかし、進級して再び教室外に出ることが多くなり、本児は「ノートを書きたくない。」「座って話を聞くのが嫌。」と理由を述べた。一方、A児の様子を見てみると、本児が口にする理由だけでなく、前担任との対応の変化に対する戸惑いや見通しがもてないことに対する不安感、聴覚の過敏さ等の別の理由もあると考えられ、本児の行動の背景をより丁寧に分析し支援を検討していく必要があると考えられた。

また、昨年度よりインクルーシブ教育実践研究校Bの指定を受け、専任の特別支援教育コーディネーターを中心とした校内体制を構築し、個別最適な学びを目指した合理的配慮の提供を中心に研究を行うことで、教職員のインクルーシブ教育に対する意識が向上し、校内で設定した対象児童への合理的配慮の提供や保護者や他機関との密な連携等を充実させることができた。一方、個別の教育的ニーズのある児童が多数存在する現状において、100%の担任が「学級に合理的配慮が必要な児童がいる」と感じているものの、「児童の特性を理解している」と回答する担任は75%、「合理的配慮を提供できている」と回答する担任は50%であり、すべての学級で適切な実態把握をしたり、支援を充実させたりできているとは言い難い。

そこで今年度は、昨年度の研究内容をより実践的な学びへと生かし、すべての学級での支援の充実を目指すこととし、実効的な校内支援体制の確立や、一人一人の学びやすさに着目した学習指導や適切な評価、だれもが居場所のある学級づくりに取り組むこととした。

## 2 研究主題

インクルーシブな学校を目指して

「わくわくする授業の創造」 ～個が生きる、個を生かす合理的配慮を踏まえた授業づくり～

## 3 取組内容

### (1) 専任の特別支援教育コーディネーターを中心とした実効的な校内支援体制の確立

昨年度から構築してきた、専任の特別支援教育コーディネーターを中心とした支援体制の更なる充実のために、組織体制(図1)や役割(図2)を整理しながら研究に取り組み、実効的な支援体制の確立を目指す。

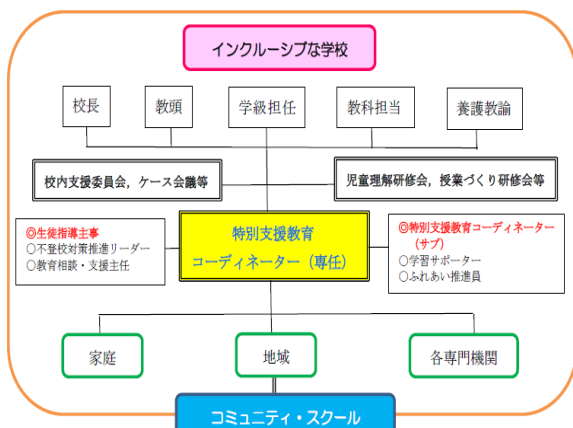


図1 研究組織体制

- ◎専任の特別支援教育コーディネーターの役割
- 児童の実態把握(アセスメント)
    - ※各学級、ふれあいひろばを利用する児童、不登校児童等
  - 研修部と連携したユニバーサルデザインを視野に入れた授業等の研究推進
  - 校内の特別支援教育に係る各種委員会の実施(PDCAサイクルを効果的に)
  - 学習サポーター、ふれあい推進員、スクールサポートスタッフとの連携及び支援調整
  - 各教科におけるTTや学習支援
  - ふれあいひろばや家庭を繋ぐICTの効果的な活用計画、推進
  - 不登校、ふれあいひろばを利用する児童の支援、保護者や各関係機関との連携
  - 校内研修計画及び講師の招聘
  - 学校運営協議会(コミュニティ・スクール)の会議参加、委員との連携、人材活用窓口
  - 保護者や各専門機関(教育相談センター、放課後デイサービス、医療機関、SC、SSW等)

図2 特別支援教育コーディネーターの役割

(2) 一人一人の学びやすさに着目した学習指導や適切な評価 ～合理的配慮を踏まえた授業づくり～

講師を招聘しての研修会で学んだことを取り入れながら行った、学校全体の主な取組は以下の7点である。

- ① 全員参加を目指した、自分の考えを自分の言葉で表現できる授業づくり  
(電子黒板や板書による視覚支援, ペア・グループ活動, タブレットの活用, 学習指導案への「個別の支援」の記載等)
- ② 授業観察記録用紙による実態の共有・合理的配慮の提供と評価
- ③ 特別支援教育推進委員会での支援内容の検討と共有
- ④ ミニケース会議(担任, 学年, 前担任, 特別支援教育コーディネーター)や, ケース会議の実施
- ⑤ 評価検討委員会の実施(管理職, 担任, 学年, 専科, 特別支援教育コーディネーター)
- ⑥ 全職員での合理的配慮や授業のユニバーサルデザインに関する具体的な取組内容の共有
  - インクルタイム…暮会での各担任による取組内容や支援ツールの紹介
  - インクルコーナー…職員室に各学年の取組内容や支援ツールを入れたボックスを配置
  - インクル通信…各担任による合理的配慮やユニバーサルデザインの実践内容等を紹介
- ⑦ 個別の指導計画・個別の教育支援計画の活用の手引きの作成と活用…年度末・卒業時の目標設定  
家庭との目標の共有, 連携

本校では、各学級1名の対象児童を担当が決定して研究を行った。その中から、A児への取組内容を報告する。学校全体の取組の一つである、授業観察記録用紙や特別支援教育推進委員会の資料に追加した“行動の背景”の項目を活用した分析を行い、以下の背景が明らかになった。

【A児の実態と背景】

実態	行動の背景
(ア) 毎時間のように教室を出る。授業では、特に算数科や音楽科の時間が長い。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・見通しが不明なことへの不安の強さ</li> <li>・友達とのトラブル等に関する、気持ちの切り替えの難しさ</li> <li>・活動の合間の待つ時間の我慢のしづらさ</li> <li>・注目欲求の強さ(愛着形成にも課題の可能性)</li> <li>・聴覚の過敏さ</li> <li>・やるなら完璧にしたいというこだわり</li> <li>・間違えることへの不安(正答と誤答が明確な、算数科への苦手意識の強さ)</li> </ul>
(イ) ノートを書けないことが目立つ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ノートを書いていなくても聞くことで理解し、記憶できる。</li> <li>・自分で考えたことは書字しやすいが、書き写す際の集中力が持続しにくい。</li> </ul>

【対応・支援の実際】 行動の背景から以下の対応や支援を行った。以下、下線が提供した合理的配慮。

(ア) 毎時間のように教室を出ることについて

A児の様子等	対応・合理的配慮
日常的な取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝の会でその日の学習や活動の内容を伝え、1日の見通しをもつことができるようにする。</li> <li>・活動の合間に待つ時間ができる際は、本児の活動内容を個別に伝える。</li> <li>・スモールステップを意識した声掛けにより、肯定的な声掛けを積み重ねる。</li> </ul>
気持ちの切り替えが難しい時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担任と本児が話し合って1時間の活動内容の目標を設定し、1時間を肯定的評価で終わることができるようにする。</li> <li>・クールダウンのために教室を出る際は、担任に行き先を伝え、戻る時間を約束できたら許可をする。本人が希望する場合は、別室で学習する。</li> </ul>
聴覚の過敏さにより授業への参加が難しい時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本児が希望する場合は、イヤーマフを着用して授業に参加する。</li> <li>・本児が希望する場合は、別室からオンラインで授業を受ける。</li> </ul>
その他連携等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミニケース会議で前担任との情報共有や支援内容の検討を行い、昨年度うまくいった関わり方を現担任に伝えることで、本児と担任の信頼関係づくりを意識しながら支援できるようにする。</li> <li>・保護者に学校での様子を伝え、結果ではなく過程を評価する声掛けや、褒める基準を共有できるようにする。</li> <li>・年度末や卒業時という中長期的な視点をもって目標の姿を設定し、効果のあった支援方法を個別の指導計画に具体的に記録して、段階的・継続的に支援を行うことができるようにする。</li> </ul>

(イ) ノートを書けないことについて

- ・本児の様子を見ながら、必要に応じて書字量の調整を行う。  
(昨年度までは板書をタブレットで撮影することもあったが、今年度は昨年度よりも書く場面が多く見られるようになってきたため、書く活動も大切にしながら支援内容を検討した。)

《評価について》

- ・校内で意見が割れていたが、評価検討委員会での検討の結果、学校全体での対応が決定した。音楽科における歌唱やリコーダー、その他の楽器の演奏について、動画撮影したものを評価対象とすることとした。
- ・その他、本児の状態によりテストを実施する場の変更を行い、別室で取り組むことはあったが、評価基準は変更しなかった。

(3) だれもが居場所のある学級づくり

- ・個別の支援に関する周りの児童の理解を促す取組 (全学級で統一した内容での説明/各学級での取組)
- ・講師を招聘しての学級づくりに関する研修会の実施 (支持的風土の醸成/レクリエーション活動等)
- ・一人一人が大切にされ、居場所のある学級にするための各学級の取組 (肯定的な言葉掛け/学級活動)

## 4 検証結果

(1) 専任の特別支援教育コーディネーターを中心とした実効的な校内支援体制の確立

教員への意識調査アンケートの結果、児童の実態把握に関する日々の共有、学習サポーターとの打ち合わせの時間の確保、講師を招聘しての研修会、関係機関との連携等の特別支援教育コーディネーターを中心とした取組の効果に関して全員が記述しており、教員全員が支援体制の充実を実感できていることが分かる(表1)。

表1 意識調査アンケート 校内支援体制に関する記述(12月)

特別支援教育コーディネーターによる児童の見取りに関する情報共有を、日々の支援に生かすことができた。
学習サポーターの先生方との連携を図ることで、スムーズに合理的配慮を提供できるようになった。
ケース会議では、こども家庭相談コーナーや相談支援事業所、放課後デイサービスの担当者等を含め関係機関の10名以上が集まり、支援に生かす場となった。
特別支援学校の専任教育主任の先生による巡回相談で、支援方法の指導や姿勢保持のための補助具の貸し出しや設置をしていただいたことにより、支援を充実させることができた。

<一部抜粋>

(2) 一人一人の学びやすさに着目した学習指導 ～合理的配慮を踏まえた授業づくり～

### 【教職員の意識】

講師を招聘しての研修会実施後に、90%以上の教員が「インクルーシブ教育への理解、児童理解が深まった」と感じており(図3①)、意識調査アンケートへの記述からも、研修会によりインクルーシブ教育や児童の“行動の背景”に着目することの大切さに関する理解を深め、日々の実践に生かすことができたことが分かる(表2)。また、2月には100%の教員が「児童の特性を理解している」、「学級の合理的配慮が必要な児童に対して、必要な配慮を提供できている」と回答し、各学級で適切な実態把握を行い、合理的配慮の提供を充実させることができたことが分かる(図3②③)。

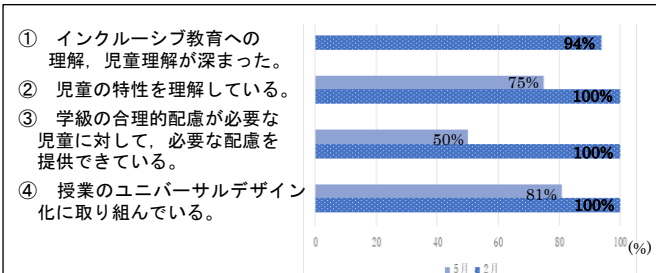


図3 教員への意識調査アンケートの結果

さらに、インクルタイムやインクルコーナー、インクル通信の取組により、合理的配慮や授業のユニバーサルデザイン化に関する具体的な取組内容を全教職員で共有することができ、各学級での実践の充実につながった(図3④、表3)。

表2 意識調査アンケート 児童理解に関する記述(12月)

講師の先生による研修を受け、児童理解の視点や支援を必要としている児童への対応に関する理解が深まった。
“行動(表面化したもの)”だけでなく、その“背景”の意識がより強まった。
つい行動だけを捉えて指導しがちだが、児童の気持ちや行動の背景を考えて指導できるようになってきた。教師の意識が変わったように思う。

表3 意識調査アンケート 取組内容の共有に関する記述(12月)

インクルタイム、インクルコーナー、インクル通信で先生方の技を知ることができ、大変勉強になった。みんなで共有できるようにしていただいているので、すぐに活用することができた。
インクル通信をしっかりと読んで参考にしている。
インクルタイムやインクル通信で支援の選択肢が増えた。
インクルタイムやインクル通信で紹介された気持ちカードを活用した。

また、全員参加を目指した授業づくりに関しては、教員への意識調査アンケートへの記述から各学級での取組の成果を実感することができたことが分かった(表4①②)。

同時に、個別の支援が必要な児童についても、実践後の成果に関する記述があり(表4③④)、児童アンケート(11月)では、自分の学級の良さを「自分に合った勉強ができる。」と回答する児童もいた。

#### 【A児について】

年度当初は毎時間のように教室から出ていた本児の学習への参加時間が、10月、11月にはほぼ100%となり学習時間が保障されたことで、特に苦手意識をもっていた算数科のテストの点数に伸びが見られた(図4)。教室から出ることが減ってきた時期に、本児が不安を感じて

いるときに幼少期からやめられなかった不安を表す行動が消失し、このことは行動の背景の分析を重視した丁寧な実態把握や、教職員間で共有し一貫したきめ細やかな支援により、学校・学級生活における不安が低減したことの表れと考えられる。しかし、12月は本児が抱く進級等への不安感や家庭的な不安要素が加わり、敏感さが顕著に表れ離席が増えたが、本児は年度当初とは違い、担任から見える範囲でのクールダウンができるようになっていたり、自分で気持ちを切り替えて教室に戻ったりすることができるようになっていた。また、担任は「A児の心が安定していない時には上靴を履くことができていることに気が付き、上靴を脱いでいる時に、きめ細かい支援をする。」と述べており、担任自身が行動の背景を分析する視点を持ち、日々の支援を行うことができるようになっていたことがうかがえた。不安要素が改善された1月は、11月に見られた本児の様子を取り戻すことができていた。

#### 《評価について》

評価検討委員会を開き、学年や専科との評価基準や合理的配慮の内容の共有の場を設定することで、本児のもつ力を適切に評価できるようにした。評価検討委員会の出席者からは、開催することの良さや、今後の改善案等に関する意見が出た(表5)。

#### (3) だれもが居場所のある学級づくり

各学級における「個別の支援に関する周りの児童の理解を促す取組」に関しては、「本人及び保護者の合意を得た上で児童の実態や配慮事項を学級全体で伝えたこと」、「スライド資料を用いて、人それぞれ得意不得意があることや、苦手への支援はずるいはずるくないかを考えさせる機会を設けたこと」等を行い、児童の変化を実感できたという発言が見られた。また、その他各学級の実態に合わせた取組を行い、「自分の学級は、安心して過ごすことのできる場所である」と回答する児童が、5月と11月共に90%以上であった。昨年度から継続してインクルーシブ教育に関する研究に取り組んでいることで、児童一人一人が大切にされ、居場所ある学級づくりが充実してきたものとする。

表4 意識調査アンケート 全員参加目指し授業づくりに関する記述(12月)

- |   |   |
|---|---|
| ① | 感想を書く活動の際、タブレットを活用して学級全員で共有する時間を設けると、普段は書くのが難しい児童も書くことができた。                 |
| ② | 自分の考えをもった後にペアやグループで共有する時間を設けることで、自分の言葉で表現する機会を増やすことができた。                    |
| ③ | 指示の内容を理解できているかを確認するためにこまめな声掛けをしたり、考えていることを聞き取ったりすることで、児童の考えを一緒に言語化することができた。 |
| ④ | 学習指導案に“個別の支援”の項目を設けたことにより、個を意識した授業づくりを行うことができた。                             |

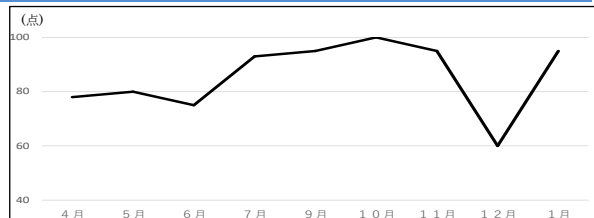


図4 A児の算数科のテストの点数の推移

表5 意識調査アンケート 評価検討委員会に関する記述(12月)

- |  |
|--|
| 評価の在り方について、学校全体で共有し、統一することができるので良かった。    |
| 評価の仕方、在り方について、評価する側によって違いが出るので検討できて良かった。 |
| 開催時期は、5月、8月、12月の年に3回くらいが良いと思う。           |
| 大まかな基準をマニュアル化し、学校全体で周知しやすいようにすると良いと思う。   |

## 5 研究成果

#### 【成果】

- ・実効的な校内支援体制の確立
- ・支援内容や評価の共有化の推進
- ・すべての学級での支援の充実
- ・A児の行動の背景の分析と支援の充実

#### 【課題】

- ・一人一人の実態により適した合理的配慮の提供 (ICTのより効果的な活用)
- ・校内の支援システムの更なる確立と共有化